



TITLE:

<大會抄録>沈玄廬の死：一九二〇
年代末の中國農村問題をめぐって

AUTHOR(S):

野澤, 豊

CITATION:

野澤, 豊. <大會抄録>沈玄廬の死：一九二〇年代末の中國農村問題をめぐって. 東洋史研究 1976, 35(3): 551-552

ISSUE DATE:

1976-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153625>

RIGHT:

七八一年）を境として、それ以前と以後とは質・量ともに差異がある。特に五世紀以降、七八〇年（或は七八七年）以前のものは、その遺存が極めて少量（全體の一・二割程度）であるにも拘らず、中央政府の諸制度（支配）・諸文化が邊境末端の敦煌に如何に浸透したかを知る素材を提供するものである。他方、七八七年以降、一〇〇二年頃までのものは、中原と隔離され、かつ外族にとり圍まれて、ほぼ孤立した敦煌が、唐末・五代・宋初の變動期に如何なる獨自の發展をとげたかを知る貴重な史料を含むものである。

本報告は、敦煌文獻の分岐點に位置する七八七年（或は七八一年）を中心に、その前後に書かれた文獻について、特に紀年を表記する文獻（特に寫本跋・文書）を抽出し、それらを年代順に並べてその内容を検討する。その結果、外形上の特徴として、(1)書寫年代を七八一年から七八七年までに比定しうる文獻が見當らないこと、

(2)吐蕃占領下の敦煌における紀年の表記は干支或は十二支をもつて示すのが通例であるが、唐朝の年號をもつた若干の文獻が存在することなどが指摘される。この(1)の現象は、吐蕃が敦煌を攻略した際の混亂期には寫經や諸記録などを書き留めておくような状況になったことを反映するものであり、また(2)の唐の年號表記の存在については、當該文獻と紀年を干支や十二支で記す文獻とは書寫時における書寫條件（書寫人の立場や書寫した時限・場所など）に何らかの違いがあったものであると思われる。このような推考を前提とすると、敦煌が吐蕃に占領されるのを契機として、敦煌ではトゥルファンや甘州で書かれた佛教の論疏を導入したことなど、敦煌佛教界における教學活動の一側面が窺知される。

沈玄廬の死——一九二〇年代末の中國農村問題をめぐって——

野澤 豊

一九二八年八月二八日、沈玄廬（定一）は、郷里の浙江省蕭山縣衙前村で、乗合バスを降りたところで暗殺された。ある茶商が殺し屋をやとって殺したもので、自動車道路の建設資金の寄付をめぐるトラブルと、茶商の第三子の農民協會の組織にからむトラブルなどが原因とされたが、その翌日に省都杭州では多くのデマが流されて、戒嚴令がしかれ、その嚴重なことは杭州では空前のものといわれた。

個人的な怨恨による犯行とも思える事件が、何故それほどまでに大きな社會的反響をよんだかが、ここでの問題である。二つのケースが考えられるが、第一には彼が浙江省清黨委員で、また浙江省反省院（政治犯拘置所）の院長でもあったことから、中共の動きが問題になりえたこと。第二には彼が中央黨部農民運動委員、および浙江省黨部特派員として、浙江省における二五減租の實施につとめ、謠言の誣いるところとなつて辭職し、郷里で地方自治に専念したといわれるが、一方で二五減租の實施をめぐる地主と農民、浙江省政府と省黨部の對立が激化していたこと、他方で彼の死後一年で特異な地方自治の試みは解體させられていることなどから、南京政權の浙江地區における基盤確立の過程における路線上の問題がありえたことも考慮されよう。

沈玄盛は、『星期評論』の編集に従事し、中共創立に加わり、荷前農民協會を組織し、五・三〇前夜に脱黨して、戴季陶とともに江浙地區での國民會議運動をおしすすめ、北伐の進展にともない、二五減租の推進、農民協會の再建、地方自治の實現につとめていたもので、彼の死はいずれにしても中國動亂の一過程を象徴するものであった。ここでは、とくに二五減租の問題とからめて、その死の意味するところを考えてみることにしたい。

堯舜民主政？

島田虔次

横井小楠は歐米の大統領制・民主政體を讚美しているが、その甥のアメリカ行を壯んじしては「明堯舜孔子之道、盡西洋器械之術、何止富國、何止強兵、布大義於四海而已」といった。堯舜孔子の道は民主主義の上乗なるもの、あるいはそれを既に止揚せるもの、と解せられたのであろう。

堯舜の道をどのようにイメージすることは果して可能であるか。それは可能であると思われる。つまり堯舜禪讓を公舉公選と考えるのである。そのように考えて堯舜を伯理爾天德（ベリエンデット）と見なした例が清末に、顯著に、ある。その例を示しつつ、且つ関連する二三の問題を論じたい。

清初史料に關する二三の問題

松村 潤

入關前の太祖ヌルハチ、太宗ホンタイジに關する史料の根本となるものは、一九〇五年内藤湖南博士が現在中國東北地方の中心である瀋陽の盛京宮殿で發見將來された『滿文老檔』とされているが、一九三一年にその原本三七冊が清の内閣大庫より發見され、ついで一九三五年には、これらと同じ性質の三冊の檔冊も發見された。しかし日中戦争によつて、その研究は中断され、その本格的な研究が始められたのは、一九六九年臺北の故宮博物院から、これら四十冊の檔冊を影印本十冊にまとめ『舊滿洲檔』と題して刊行されてからである。その結果、判明したことは、『滿文老檔』は從來想像されていたような原檔の、そのままの形態の忠實なコピーではなく、乾隆の史臣による編纂の手が加えられていることである。したがって今後の入關前史の研究は『舊滿洲檔』に據らねばならない。

また現行の大清歷朝實錄に收められている太祖・太宗・世祖のいわゆる三朝實錄は、いずれも乾隆の改訂本であつて、初纂本の内容とは多大の隔りがあり、その史料の價值は江戸時代に我が國に傳來した康熙本の三朝實錄に劣ることは、つとに清初史研究者の指摘するところであつたが、臺北の故宮博物院に所藏されている漢文の『太宗實錄』は順治初纂本であることが認められた。したがって今後の太宗時代の研究は、この初纂本に據るべきであらう。さらに同院所藏の滿漢文の『太祖武皇帝實錄』は順治重鈔本であり、乾隆重